

2024年度 本郷中学校 第2回入試 国語講評

出題形式は同様で大問三問。全体平均は61.7（昨年63.3／一昨年55.8）

【一】 漢字の出題 教育漢字（小学校学習漢字）の書き取り、読み問題

【二】 論理的文章 ヤニス・バルファキス著・関美和（せきみわ）訳『父が娘に語る 美しく、深く、
壮大で、とんでもなくわかりやすい 経済の話』

【三】 文学的文章 松浦寿輝（まつうらひさき）『無月の譜』

【一】

例年通り短文形式5題の出題。出題した漢字自体は標準的なもの。概ね高い正答率だった。③「景勝」については正答率は比較的low、差がついたのではないかと。

【二】

グローバル化する資本主義経済と環境問題との関わりについて述べた文章。翻訳文であり平易な語り口ではあるが、筆者の問題意識を読みとれるかどうかを問う設問であった。選択式の設問は概ね5～7割程度の正答率であった。記述式の設問についても意欲的に取り組んだ答案が多く見受けられた。

【三】

大叔父の制作した将棋の駒を探し求めてニューヨークを訪れた主人公のその将棋の駒と巡り合ったときの場面を描いた文章。選択式の設問については正答率が概ね6～7割程度であった。記述式の設問についても配点の10点をとれたものこそ少なかったが、部分点を与えられた答案は少なくなかった。

全体を通して、90点台から10点台まで非常に幅広く受験生が分布する結果となった。記述式の設問については空欄は少なく、意欲は感じられた。また、自分の理解を言葉にすることができている答案も見受けられた。上位層には大変に力のある受験生が多かった。

2024年度 本郷中学校 第2回入試 算数講評

<講評>

■問題の難易度（昨年同回比）：

昨年同回と同程度かやや得点しやすかったか。平均点は予想を超えて高めとなった。

■（第2回）の受験者の算数学力：

受験者のレベルは、算数に関しては昨年の第2回と同程度か、それ以上。昨日の受験者層より数段上位の層が大勢受験していた。

■「答案から見られる特徴」と「今後の対策」：

志願者数増にもかかわらず、定番問題は取りこぼしなく得点していたことも含め、全体としてよい出来栄であった。

字の丁寧さを意識して欲しい答案が少々あった。

■実力差が顕著になった問題（正答率が4割～6割の問題）は以下の通りであった。

- ・ 問2(3)：長方形の帯から半円3個を除いた時の残った部分の面積の問題。
定番問題ながら丁寧な計算が必要とされる。
- ・ 問3(2)：本校における定番のグラフの問題の後半部分。グラフからの読み取りに時間がかかる。
- ・ 問5(2)：水に浮いた氷を取り除いた時の水面の高さの変化から容器の形状を考える問題。
いわゆる平方数を扱っていく処理に慣れていたがポイント。
- ・ 問5(2)(3)：問5全体の出来栄は得点伸長に大きく影響したようである。該当する整数を見つける問題であるが、対話をヒントに誘導に乗っていくタイプで、キレイに誘導に乗っていれば少々の試行錯誤で結論を見つけ切ることができる。完答者も多数。

→「実力差が顕著になった問題」は特に注意して練習しておく
(過去問で類題をピックアップして確認しておく) とよい。

以上

2024年度 本郷中学校 第2回入試 社会講評

■全体

第1回に比べて比較的オーソドックスな設問が多く、過去問を用いた対策が功を奏したのではないだろうか。平均点は高く答案の漢字も丁寧に書いていた印象だが、その漢字字体を間違えてしまっている事例が目立った。難易度が高くなかっただけに、漢字ミスによる失点は残念なことである。

■地理

農林水産業や鉱工業や気候、文化などの観点から、人間が周囲の環境から影響を受けるだけでなく、反対に影響を与えているという事実に関連する出題となった。全体的に正答率が高かったものの、知識の理解の正確性が重要な正誤問題の正答率若干低かった。また、問題文に正解へのヒントがいくつもあったのに、1つのヒントだけに引きずられて、正解にたどりつけなかった解答が多くみられた。そして、何度も出題されたことのあるタイプの、平野と河川、山地（山脈）と河川のような2つの自然地名の組み合わせを問う設問の正解率が低かったのは驚きであった。

普段の学習においては、さまざまな知識の正確な理解と関連づけを心がけるとともに、自然地名を地図帳で習慣的に確認することを心がけてほしい。また、きちんと手を動かして字を書くことも重要である。解答においては、問題文の細部にも気を配りながら読んで、丁寧に字を書いてほしい。

■歴史

日本文化の地方性に関する問題。特に、関東地方の醤油にまつわる食文化をテーマに、歴史的または地理的な思考をしながら解答してもらう問題。本郷中3の生徒が卒業論文の取材のために現地調査するという状況設定。中3年次で全員が実際に取り組む卒論の作成プロセスをすこし紹介するものもあった。

○各論

- ・歴史上の特定の出来事や時代の特徴などを問う問題については、同時期の出来事を選ぶ問題、その時代にはすでに起こっているか、まだ起きていないか（大逆事件）などは概ねできていた。しかし、正誤問題的な聞き方になるとやや正答率が下がった（摂関政治は藤原以外にも摂関になった？→誤文）。
- ・東日本西日本の醤油をめぐる文化の違い（関東はなぜ濃口醤油？）や、風土に規定される住宅様式の違い（北関東の屋敷森）は、単語の暗記でなく、状況を読み取り、考えて選択肢から選ぶ形式だった。想定よりも出来は良かった。
- ・しょつつる・きりたんぼ ⇒「秋田県」という人文地理的問題も出来は予想以上に良かった。
- ・知識問題となってしまったが、昨今防災に関する関心の高まりで注目されている「稲村の火」の話は、かなりの小学生が知っていると思い出題したものの（事前に情報収集もしたが）、正答率は今回の設問中最低であった。

■公民

AIの活用が広まっている現状をテーマとして、国会・内閣・裁判所を中心としたオーソドックスな出題。全ての問いで高い正答率となり、受験生がしっかり勉強してくれてきたことが伝わってきた。このように公民では基本事項を多く出題するので、むやみに細かい知識を覚えようとするのではなく、過去問を解いて、原理原則をおさえる学習を進めてほしい。

なお問1の「モンテスキュー」について、シャルル・ド・モンテスキューなどのようにフルネームかそれに近い解答があった。もちろん正解であるが、一般的によく知られている名称を答えれば十分である。日本人などの場合は、たとえば「伊藤」だけではなく「伊藤博文」と答える必要があるが、欧米系の人名についてはモンテスキューのような答えで特段問題ない。基準について詳しく知りたい場合は、過去問の模範解答で確認しておいてほしい。

2024年度 本郷中学校 第2回入試 理科講評

例年通り、物理・化学・生物・地学の4分野から、ほぼ均等な配点で出題した（設問数34問 昨年33問）。昨年度とほぼ同数の設問数であったが、第2回入試は実験データの解釈やリード文を読み取った上での計算問題など、正確で素早い情報処理を要する設問が多かった。また、正しい組み合わせを解答したり、正しい選択肢をすべて選んだり、正解しにくい設問が多いのも特徴であった。そのような理由から、しっかりと取り組めたにもかかわらず、点数が伸びなかった受験生が多かったかもしれない。

受験者平均点が42.0点（正答率56%）で、ほぼ例年並みと考えられた。すべての大問について、感覚的に反射的な素早さで解くのではなく、理科として正しい考え方に則って丁寧に読解していく必要であった。一方で、桁数・繰り上げ・切り下げのミスと思われるような惜しい計算ミスのある解答が散見された印象である。

	今年度			昨年度			
	分野	内容	配点	設問	内容	配点	設問
①	物理	振り子の運動の性質	17	6問 (記述1題・計算3題・データ読取)	光の性質 (屈折・反射・レンズの性質)	19	8問 (作図2題・計算1題)
②	生物	生物のからだ と塩分濃度	21	10問 (データ読取4題)	気体の重さ・性質	19	8問 (計算2問)
③	化学	水溶液	19	7問 (計算4題)	血液の凝固・ 血液型の遺伝	19	9問 (データ読取6題)
④	地学	天文・流星・彗星	18	11問 (計算3題)	気象 梅雨明け・偏西風 ラニーニャ現象	18	8問 (データ読取1題・ 計算1題)

①物理 振り子の運動に関する問題。【実験データの読み取り・現象の予測と理解】10.2点／17点（60%）

振り子の長さ、おもりの材質・重さ、振れ幅を変えて、振り子を20往復させる実験を行った時の実験データを使って、振り子運動の性質を理解する設問。理想的な運動について考えることに加えて、記述問題として、実際の実験では空気抵抗や摩擦が原因となって運動が止まってしまうことを問うた。答案からは、実験の内容や現象について、概ね理解できていたことがうかがわれた。振り子の運動に電磁石を組み合わせた出題に対する正答率が低かった。全体を通して、データを正しく読み取れたかどうかに加えて、受験生のもつ素朴概念と物理的本質との間に差があり、運動を正しく理解できずに正解を導けなかった解答が多かったものと思われる。

②生物 生物のからだと塩分濃度に関する問題【実験結果やグラフに対する考察】9.0点／21点（43%）

ナメクジに塩をふると、ナメクジがとけると言われているが、実際には細胞膜を介した体内と体外との塩分濃度の差に起因する浸透現象である。この現象を確かめるための複数の実験結果を読み取り、結論を導いていく設問。さらに、淡水魚と海水魚の浸透圧調節の仕組みを考え、グラフを考察する出題を加えた。正答率が低調であったのは、正しい選択肢をすべて選ぶ完全解答が多かったためと思われる。特に、軟体動物を選ぶ設問と、グラフの考察と海水魚・淡水魚・遡河魚の分類を組み合わせた設問についての正答率が低くなっていた。

③化学 発汗と塩分補給を題材にした水溶液に関する問題【基本知識と読解力】13.2点／19点（69%）

汗の中には塩類が含まれていることから、発汗により失われた水分と塩分をスポーツ飲料によって補給することに関する文章から条件を読み取りながら計算を進める設問。併せて、水溶液の基本的な性質を出題した。基本的な出題はもちろんであったが、全体としてしっかりと問題文を読み取って正しく計算されている解答が多かった印象である。計算間違いによって、現実的ではない大き過ぎたり小さ過ぎたりする水の体積や塩の重さを答えてしまった解答も見られた。題意に対して妥当な数値であるかどうかを試験中に判断することは、受験生にとって簡単なことではないので、生活の中で触れるものの体積や質量に興味を持ってもらいたい。

④地学 天文分野から流星や彗星に関する問題。【天体観測に対する興味と理解】9.6点／18点（54%）

昨年8月13～14日に観測されたペルセウス座流星群に関するリード文を読んで、三大流星群、月、流星、星座、彗星についての設問であった。時事的な内容ではあるものの、三大流星群すべての名称は細かな知識を問うたものであったと思われるが、その他の流星や彗星に対する設問に対しても、正答率は想定していたよりも低いものであった。ただし、エンケ彗星の公転周期を用いた計算問題については、リード文をしっかりと読み取って、正しく考えられていると思われる答案が多かった。ただし、分母と分子を逆にしてしまったり、桁数の大きな数の計算でミスをしてしまったりしたと思われる答案が相当数目についた。